

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第58回 こちらで一服小休止

## お茶の東西：茶の湯はどこまで世界に通用するか

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター研究員、  
総合研究大学院大学教授)

新茶の季節を迎えた。日本文化の心、といえはお稽古ごと。海外にその心を伝えるとなれば、茶の湯。それは、いまでは大切な国際文化使節といつてよい。天心・岡倉覚三が英語で『茶の本』(一九〇六)を著し、武力による国際覇権ではなく、お茶の嗜みによる平和な国際相互理解を説いてから、すでに百年以上が経過した。では外からみた日本の茶道、外に伝える日本のお茶には、いかなる可能性と制約があるのだろうか。

日本で発達したお茶は、茶の葉緑素をそのまま粉末にした抹茶が主流といつてよい。だが玉露など、バリの水道飲料水で澀せば、もう飲めたものではない。抹茶は水質検査のリトマス試験紙に変貌する。北京でも日本通の中国人には茶の湯を楽しむ面々もある。だが硬水では、日本のようなお茶の香りも旨みも削がれてしまう。中華料理には緑茶はあわず、不発酵茶でも煎茶、あるいは烏龍茶のような半発酵茶、プーアル茶のような後発酵茶の方が、より適している。日本列島で暮らしていると、なかなか気付かないことだが、茶の湯は、鰹節をダシに使うグルタミン酸好み、軟水系の海洋性魚介類文化の賜という制約を背負っている。

茶の湯の心を伝えるのに、香りと並んで大切なのは、器から肌に伝わる四季折々の感触だろう。冬場の湯気の暖かさ、夏場のさっぱりとした爽快感、そして口に接する

器の触覚。それ抜きには、茶道の美的観照は成立しまい。静かな茶席の落ち着いた佇まい。正座して心を澄ましていると、茶釜の立てる仄かな沸騰の音や、外の庭からの風のそよぎや小鳥の囀りも、耳に心地よく響いてくる。川端康成も述べているが、香りは触覚と密接に結びつき、人間の声ではない自然の物音への感受性を励起させる。ここに、ひたすら言語の雄弁さを競い、視覚の豪華をみせつける西欧文化への代替案を見いだすことは容易い。西欧起源の物質文明が軽視してきた感覚要素を大切に、五感の相互作用を穏やかに交差させつつ増幅させようとする価値観が、茶には宿っている。茶道具が、美術館・博物館のガラスの陳列ケースに収納され、手の届かない世界に隔離されてしまえば、その瞬間、茶の美的体験は、もはや成立しなくなる。茶の湯の世界からは、欧米近代発案の文化展示施設の陳列・鑑賞装置がいかに不自由なものでしかないかも、悟られてくる。

だが、ここに茶の魔力も潜んでいる。様式にまで高められた所作と、装った簡素さの約束する共感覚体験が、ことさら外国で受ける。有名な逸話だが、利休は見事に掃き清められた庭には満足せず、敢えて木の幹を揺すり、そこに木の葉をわざと散らしたうえで客を迎えた。この逸話は、海外の聴衆に向かって説くと、意外なまでの、誘引効果を発揮する。だからこそ、岡倉覚三も

『茶の本』でこの話題を開陳したのだろう。次の世代の柳宗悦もまた、吉左衛門の井戸茶碗から力を借りて民藝の美を語り、それが海外でも大反響を呼んだ。オクタビオ・パスが序文を寄せた *In Praise of Hands, World Craft Council, 1974* が、その典型だろう。敗戦後すぐ、谷川徹三は、茶には社交・儀礼・藝術・宗教が融合しているとして、そこに総合藝術の風格を見いだした。だが茶道にはさらに諸感覚の総合を通じた、自然と文化との対話、東西融和への誘惑がある。逆説的にも、風土に根ざして彫琢された極東モースーン地帯の茶道の地域の特異性が、そこに内在する文化的限界

や制約ゆえに、かえって世界に通用する普遍性を発揮する。ここには特殊と普遍の、危うい弁証法が実践される。

「日本の美術」を世界に売り込もうとするならば、茶道には今なお見逃せない教訓が潜んでいる。

\*総合地球環境学研究所主催「人と自然：環境思想セミナー」における熊倉功夫氏の講演「茶の湯とは何か：別なるライフスタイルへの問いかけ」二〇〇八年四月二四日席上での、筆者の即興のコメントに基づく。熊倉先生に謝意を表す。なお田中秀隆『近代茶道の歴史社会学』思文閣出版、2007年および同氏司会の『岡倉天心・国際シンポジウム「茶の本の百年」』小学館スクウェア、2007年からもおおきな示唆を得た。

## オクタビオ・パス「使うことと思索することと」

芸術作品の命運は、空調を施された美術館に極まる。これに対して、工業製品は、最後にはゴミ箱行きだ。手作りの品は、ふつう美術館のガラスの陳列ケースからは逃れるが、たまたまそこで生涯を終えらるゝとなっても、名誉ある無罪宣告によって放免される。それは唯一無二の物体(「作品」)ではなく、典型の一品なのだから。なるほどそれは目を捉えはするが、アイドルではない。手芸品は時間と律儀に歩調を揃えて歩みをすすめることもなければ、時間を持ち越えてやろうともしない。鑑定家は芸術作品に「死」が浸潤したりはせぬようにと、定期点検を怠らない。絵画のひび割れ、霞む輪郭線、変色、アジャンターのフレスコやレオナルド・ダ・ヴィンチの画布を蝕む浸食などが芸術作品を脅威に晒す。芸術作品は永遠ではない。だが芸術家たちは、かれらの作る作品こそが、唯一の真実なる時間を所有している、ということこそを、忘れがちだ。それは空虚な永遠ではなく、泡立つ瞬間であり、精神を利発にさせ、その未裔たる作品のうちに、たとえ否定の形を取るにせよ、再来する力能なのだ。工業製品に復活など不可能だ。工業製品は迅速に出現し、それと同じく迅速に消滅する。なんらの痕跡もあとに残さなければ、それこそまことに完璧だった、ということになりましょう。だが不幸にして、それには図体が備わっており、この図体がひとたび役立たずとなれば、それは処分も厄介な「がらくた」となる。美術館の永遠さが致命的なのに劣らず、破壊不可能な廃品の卑猥さもまた、やるせなくも痛ましい。

手で拵えられたモノは、何千年も生き残ってやろう、

などという欲望は宿していないし、かといって早死にしてやろうといった熱狂の衝動に囚われてもいない。それは日々定められた役回りをこなし、河の流れが我々を遠くへと連れて行くように、我々とともに漂ってゆく。そしてすこしずつ摩滅してゆくが、死を求めもしなければ、死を否認することもない。それはただ死を受け入れるだけだ。美術館の時間なき無一時間と、テクノロジーの加速化された時間とのあいだにあって、職人気質とは、人間の心臓の鼓動である。手で拵えられたモノは役に立つ品であるとともに、美しい品でもある。それは長持ちする物体だが、時と共に徐々に老化してゆく品物あり、老朽への諦念をも甘受している。芸術作品のように唯一無二ではなく、己に類似しているが同一ではないような、いまひとつの品に置き換えられたとしても構わないものである。職人の手仕事の品は、我々に死ぬ術を教えるが、だからこそいかに生きるかを教えてくれるものでもあるのだ。

[マサチューセッツ州、ケンブリッジにて、1973年12月7日 (結論部抜粋)]

Helen R. Laneによる英訳からの重訳。このエッセイは *In Praise of hand, Contemporary Crafts of the World*, New York Graphic Society, Greenwich, Connecticut, published in association with the World Crafts Council, 1974への寄稿として執筆された。なお本書の冒頭には Sôetsu Yanagi, "The Kizaemon Tea-bowl," from *The Unknown Craftsman*, adapted by Bernard Leachが引かれている。

訳=稲賀繁美